

実践レポート

教職協働による「生命科学部 独自留学プログラム」の参加者の増加に向けた取り組み

辰 野 有・山 中 司

要 旨

本実践レポートでは、第6期を迎えた生命科学部独自留学プログラム「カリフォルニア大学デービス校における English for Science & Technology」が、過去最低の参加者数であった前年の状態を改善し、過去最高の参加者数を達成するに至った2018年度の教職協働の取り組みを報告する。本取り組みは、危機意識を共有し、ゼロベースで担当教職員が抜本的問題解決に挑んだ一つのモデルケースである。具体的には、徹底的な議論を通して課題を見極め、次に示す改善策に、学部を挙げて取り組むことで効果を上げた。(1) 広報機会の拡充と内容の充実、(2) 参加費の抑制、(3) 特徴点の明確な伝達、(4) 募集ガイダンスと募集期間の見直し、(5) 申込資格の見直し、(6) 熱意を伝え、信頼性を持ってもらう広報の工夫。

キーワード

学部独自留学プログラム、生命科学部、学部のグローバル化、教職協働、熱意

1. はじめに

学部教学において、グローバル化を意識し、それを目標に掲げることは、時代の潮流としては避けられなくなってきた。これは何も国際系、外国語系、教養系の学部のみを指すのではなく、理系の学部についても同様である。2008年の学部開設以来、生命科学部はグローバル化を学部教学理念に掲げ、その一環として「プロジェクト発信型英語プログラム¹⁾」として独自の英語教育を行ってきたが、当時の七者懇談会²⁾において、学生からの声として「英語教育で身につけた英語能力を使う場が欲しい」、「せっかく授業で発信能力を培っても、発信する場がない」と意欲的な問題提起が起こった。そこで学部独自の留学プログラムを、英語教育の延長線上に構築し、ライフサイエンス系の学生のグローバル化に資する取り組みを行うことになった。これが2013年度、開学6年目にして実現した動きである。

本学は文部科学省によるスーパーグローバル大学創生支援を受け、全学を挙げて留学の取り組みを促進している。ただし学部レベルでのグローバル化の取り組みは決して容易ではない。とい

うのも、各学部が教職員の盤石な担当体制を敷き、しっかりとしたノウハウを蓄積し、機動力や実力を備えた担当者が、次々と新たな留学の促進を仕掛けられるだけのリソースを持つことは不可能に近い。片手間とまでは言えないが、一部の担当者だけの動きにとどまってしまうことも少なくない。しかし言うまでもなく、留学プログラムは、グローバル化を標榜する学部の人材育成目標の重要な要素として不可欠である。今回の取り組みを通して、いかに理系学生の多くが実は留学に潜在的な関心を持ち、制度の柔軟な変更によって、その潜在的ニーズを顕在化させることができるかについて再認識することができた。

本取り組みを一つのケースとして、参加者数が伸び悩む学部独自留学プログラムに対する対策の数々を示すと共に、教職員の危機意識から生じた結果的な「熱意」が、取り組みを通して学生にも無理なく伝わり、それが大きな改善の機運をもたらす可能性を大いに強調し示したい。

2. 学部独自留学プログラム「カリフォルニア大学デービス校における English for Science & Technology」の経緯

2.1 プログラムの概要

本プログラムは、2013年度に、生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部の学部生を対象に、学部が主幹となって行っている唯一の留学プログラムとして口火が切られ、2016年度から総合心理学部の学部生にも門戸を広げ実施している。学生は、約1ヶ月間、アメリカのカリフォルニア大学デービス校において、英語による集中的な語学トレーニングを受けるだけでなく、クラスや各自のテーマに基づいたプロジェクト活動、世界中から来ている留学生たちとの交流等を通じ、英語力の向上や能動性・自律性が身につけられる有意義なプログラムである (Yamanaka 2015)。プログラムの運営は、生命科学部・薬学部の4名の教員（うち専任3名）と生命科学部事務室の2名の職員（専任及び専門契約）が担っている。プログラムの募集・広報から選考、事前講義、帰国後の報告会を教員・職員が連携して実施しつつ、教員が教学的な指導・評価、職員が事務手続きを主に分担している。

開始初年度から、参加者のプログラムへの満足度は高く、英語力の向上や帰国後の学習意欲の持続等の成果も可視化され、本プログラムは順調な滑り出しを見せていた。

2.2 プログラムの参加者数

プログラムの募集は、応募書類を事務室窓口にて提出受付を行う。その後、応募者全員を対象に書類と面接によって総合的に選考を行い、参加者を確定している。

参加者数は、第1期～第2期は募集定員を超えるまたは募集人数を上回る順調な推移を見せた。ところが第3期の2015年度以降は、申込者数が定員を下回り募集人数が充足しない状況が常態化した。特に2017年度は、最小催行人数の12名を1名超える13名が参加しかろうじて実施することができたが、プログラムの中止の可能性もありうる状況で、これが担当の教職員に相当な危機意識を生じさせることになった。参加者数が減少することは、生命科学部にとって、英語科目における牽引役の学生の育成ができず、教学的観点やグローバル化促進の観点で深刻な問題と捉えられた。

表 1 第 1 期～第 5 期のプログラムの申込者・参加者

	2013	2014	2015	2016	2017
	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期
募集人数	12	40	35	35	35
申込者	49	43	20	28	13
合格者	43	40	20	28	13
不合格者	0	3	0	0	0
合格後辞退者	1	5	3	4	0
参加者	42	35	17	24	13

2.3 参加者数の減少の要因

参加者数の減少の問題を解決するため、第 6 期の 2018 年度政策を考えるにあたって、担当の教職員間で、考えられる要因に関して何度も話し合いを重ねた。検討の過程で、学生へのヒアリングや他学部の実践事例を詳細に調べ、それらを踏まえ、課題は（1）広報不足、（2）参加費の高さ、（3）不明瞭な特徴、（4）募集ガイダンスと募集期間の間延び、（5）申込資格とプログラムのターゲット層の乖離、（6）学生への熱意の不足であると考え、対応する改善策をまとめて生命科学部執行部会議で議論し、改善策に取り組むこととした。

3. 参加者数の増加の改善策

課題を踏まえ、以下の改善策に取り組んだ。

- （1）広報機会の拡充と内容の充実
- （2）参加費の抑制
- （3）特徴点の明確な伝達
- （4）募集ガイダンスと募集期間の見直し
- （5）申込資格の見直し
- （6）熱意を伝え、信頼性を持ってもらう広報の工夫

3.1 プログラムの広報機会の拡充、内容の充実化

これまでもチラシ配布・ガイダンス等の広報は実施してきたが、抜本的に広報機会を拡充、内容を充実することにした。

1 点目は、9 月の秋学期開講直後の英語の授業内で、英語の教員によるチラシ配布を実施した。チラシは、「安くなった今年こそ野心をもって是非」など関心を引くキャッチコピーを用い、参加費を抑制したことも記載した。英語の教員が、チラシをもとに、熱心に学生に参加を呼びかけた。

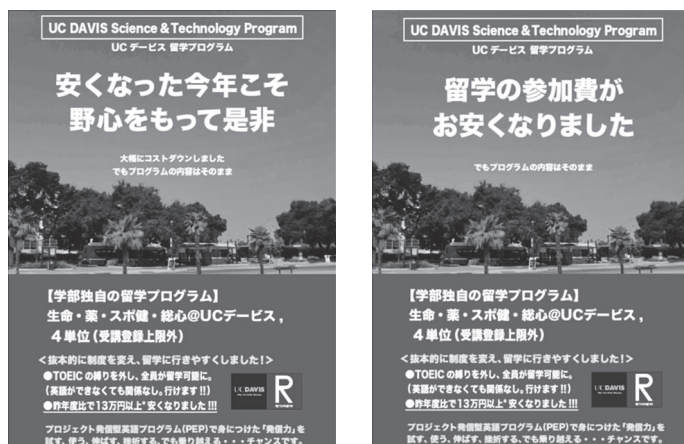


図 1 チラシのデザインの一例

2 点目は、募集ガイダンスの回数増加・内容の充実をはかった。これまで、募集ガイダンスは、18 時～19 時 30 分の 1 回のみの実施だったが、学生が参加しやすい時間帯の昼休みに 3 回、夕方 18 時に 2 回実施した。結果的に、昼休みを中心に、合計約 130 名が参加した。

ガイダンス内容の充実については、これまで、90 分間で実施していた内容を簡潔にポイントを説明することで、30 分に圧縮した。教員からはプログラムの教育的意義・激励を、職員からはプログラムの特徴や身につく力（学習成果）、参加費・奨学金を主に伝えた。また、過去にプログラムに参加した先輩学生にも協力を依頼し、プログラムで身についた力（学習成果）、帰国後の学生生活に生かしたことについて、経験談を交え説明してもらった。

3 点目は、A0 サイズのカラーポスターを生命科学部事務室付近やフォレストハウスに、A3 サイズのカラーポスターをコラーニングハウスに設置した。学生の関心を引くことと、留学募集のイベント的な雰囲気を戦略的に醸成させた。

また、manaba+R での広報も複数回実施し、学生が関心を持つよう試みた。

表 2 募集ガイダンスの概要

年度	日程	回数	時間	内容	のべ参加者数
2017 年度 まで	6 月中旬～ 下旬	1 回	18 時～19 時 30 分	・教員の説明（10 分） ・職員の説明（30 分） ・藤田 ³⁾ カリフォルニア大学デービス校教員の説明（40 分） ・参加者体験談（10 分）	約 20 名
2018 年度	10 月上旬	5 回	・12：20～12：50 （3 回） ・18 時～18：30 （2 回）	・教員の説明（5 分） ・職員の説明（10 分） ・藤田カリフォルニア大学デービス校教員の説明（1 回、10 分） ・参加者体験談（5 分）	約 130 名

3.2 参加費の抑制

参加費が 50 万円を超えていることは、学生に割高の印象があると考えたため、旅行会社やカ

リフォルニア大学デービス校の担当者と交渉を行い、参加費の抑制に取り組んだ。

世界情勢で、航空券は燃料代や空港税・旅客税が上昇していたが、韓国経由便にすることで抑制できた。プログラム費やホームステイ費は、アメリカの物価上昇等によって全体的に値上がり傾向にあったが、プログラム費はカリフォルニア大学デービス校のご厚意により抑制、ホームステイ費は微増におさめることができた。

奨学金は、例年活用している国際部の海外留学チャレンジ奨学金に加えて、情報理工学部主管のみらい塾 NEXT 奨学金を活用させていただいた。みらい塾 NEXT 奨学金は、2017 年度までは、1 回生のみ対象だったが、情報理工学部と交渉し、2～3 回生も対象とすることができた。

結果的に、参加費は 2017 年度と比較して大幅に抑制することができた。

表3 プログラムの参加費の比較

費目	2017 年度 参加費	2018 年度 参加費	差額
航空券代	155,000	148,820	- 6,180
プログラム費	276,310	272,487	- 3,823
ホームステイ費	131,194	132,053	+859
F1 査証手続き関連費用 *	50,240	49,360	- 880
参加費合計	612,744	602,720	- 10,024
海外留学チャレンジ奨学金	- 80,000	- 80,000	0
みらい塾 NEXT 奨学金 *	N/A	- 80,000	- 80,000
奨学金を差し引いた参加費	532,744	442,720	- 90,024

* 当時のレート換算で日本円に計算

* 当初は、査証は、ESTA（電子渡航認証システムの Electronic System for Travel Authorization の略語。米国に渡航する前に事前検査を行うため米国政府により開発されたオンラインのアプリケーションシステムで、ビザ免除プログラムのもと渡航する資格があることが確認される）を利用する予定だったので、さらに約 4 万円安くなる予定だった。

* 奨学金は参加費から差し引く形で運用

* みらい塾 NEXT 奨学金は、生命科学部・スポーツ健康科学部のみが対象

3.3 特徴点の明確な伝達

学内の様々な留学プログラムがある中、学生が本プログラムを選択するには、その特徴点を明確に伝達する必要がある。そこで、本プログラムの強みや将来の就職活動・卒業に関わって、学生の関心が高いと考えられる「身につく力（学習成果）」や理系のテーマを扱ったテラーメードのプログラム内容であること、イニシエーション型の留学プログラムで初めての海外経験であっても安心して参加できること、宿泊はホームステイで授業外でも密な異文化体験と英語使用の場が用意されていること、単位が年間受講登録制限外で授与されること等を募集ガイダンスで説明し、募集要項や manaba+R の広報文で簡潔にまとめて伝達した（資料参照）。

2018年度
UCデービス 留学プログラム

ENGLISH FOR SCIENCE
AND TECHNOLOGY

UC DAVIS
Division of International Programs

1. 目的・プログラム概要

「生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部・総合心理学部」
UCデービスプログラムとは？

最も国際化が進んでいるライフサイエンス分野では、グローバル連携のプロジェクトが展開され、世界中から集まるライフサイエンスの専門家が、情報や意見を交換し、その成果を国際学会で口頭発表し、論文や報告書として発信しています。そのため、生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部・総合心理学部の「プロジェクト推進活動プログラム」では、生命科学・薬学・スポーツ健康科学・総合心理学部の各領域の研究者をプロジェクトチームとし、世界中から情報を集め、議論し、その成果を英語で発表する能力の養成を行っています。

2013年度より、生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部の授業内容が反転された学際統合の海外留学プログラムを実施することになり、2017年度から総合心理学部が加りました。本プログラムを通じて、豊かな教養、専攻分野の幅広い素養を基礎にした専門的知識に加えて、国際的に発信し、活躍できる人材育成を目指します。

「これぞ日本人でしか！ 発信できる力、実践できる力、競う人の積極的な参加を期待しています！」

プログラムの特徴は？

1. 身につく力（学習成果）
 - ・英語の聴学力の向上
 - ・発表やプレゼンテーションスキルの向上
 - ・最先端のサイエンスやテクノロジーの分野の知識の習得
 - ・英文で情報力の向上
2. 海外体験が初めての方を主な対象とした短期間のイニシエーション型プログラム
3. 単位授与
4. 基礎科目または教養科目として4単位授与予定（詳細は所属の学務事務室に確認ください）
5. 大学内の実験・研究室見学、現地企業とのフィールドワーク
6. 大学周辺の地域住民の家でのホームステイ
6. 現地で日本人教員によるサポート

図2 募集要項の内容の抜粋

3.4 募集ガイダンスと募集期間の見直し

これまで、募集ガイダンスはカリフォルニア大学デービス校から来学される教員の関係で6月に実施し、募集期間は9月末～10月上旬としていた。しかしながら、定期試験や夏期休暇を挟むことで間延びし、学生の参加に対するモチベーションが維持されにくい要因になっていると考えた。

そのため募集ガイダンスは秋学期開講の2週目、募集期間は10月上旬～中旬とし、募集ガイダンスと募集期間に時間的な連続性を持たせることにした。なお、カリフォルニア大学デービス校の教員は、10月の募集ガイダンスに来学していただくよう調整した。

表4 募集ガイダンスの日程と募集期間の日程

	募集ガイダンス	募集期間
2017年度まで	6月中旬	9月末～10月上旬
2018年度	10月上旬	10月上旬～中旬

3.5 申込資格の見直し

本プログラムの申込資格の一つとして、TOEIC 450点以上としてきた。理由は、JASSO（Japan Student Services Organization、独立行政法人日本学生支援機構）の奨学金プログラムに申請する際、TOEIC 450点以上を派遣基準として指定したためである。しかしながら、次に挙げる課題があり、かつ、本プログラムがイニシエーション型で、参加意欲の高さを重視していることから、申込資格にTOEIC 450点以上を設定しないこととした。そのことにより、潜在層が申込可能となり、参加者増につながると考えた。

『学部独自留学プログラム「カリフォルニア大学デービス校における English for Science & Technology」の応募者拡大を目的とする運用変更に関する提起（2018. 7. 19 生命科学部執行部会議）』の抜粋

- ・本プログラムがJASSO申請にあたってTOEIC 450点以上を派遣基準として指定してきた。そのため、参加学生のJASSO奨学金の受給の有無に関わらず、TOEIC 450点未満の学生はそもそもプログラムに応募できなくなった。
- ・JASSOが奨学金対象者とするGPAが比較的高い水準にあり、本プログラム参加者の多くがその恩恵にあやかれていない（枠を持っていても、その枠を使いきれない年度が複数発生している）。
- ・JASSOの方針により、2016年度より同一プログラムで応募の場合、前年度比の8割を目安に採択件数を減少させることを決めている。そのため、いつかの年度で、学生が受給対象を満してもJASSOが支給されないことが起こりうる（2017年度時点では、本学の受給対象学生は幸い全員JASSOに採択されている）。
- ・本プログラムでは、「立命館大学海外留学チャレンジ奨学金」も併給しているが、その奨学金の支給額、併給基準は以下になっている。JASSOを受給することにより、「立命館大学海外留学チャレンジ奨学金」を併給できない可能性があり、奨学金を安定して受給できないことや事前に学生に支給額を正確に伝えることができない。

■併給基準

学外奨学金（給付型）の支給総額が本奨学金の支給総額を上回る場合は、併給を認めない（例：「JASSO 海外留学支援制度」など）。

先述した問題があることを把握しつつも、いわば国の承認・評価であるJASSOの「お墨付き」を蹴ってまで申し込み資格を変更することについては当然議論があり、大きな政策変更の判断が学部として必要になった。この点に関しては、学部の英語教育の理念とも関連し、留学とTOEICについて今一度根本的な議論を教職協働で行い、学部執行部と共に真剣かつ慎重に政策転換に取り組んだ。「どんな学生でも、どんな英語のレベルでも、堂々と発信できるし、すべきである」、「英語ができるようになってから発信するのは間違い」、「仮に英語のテストスコアが低かったとしても、英語ができない学生は果たしてグローバル化してはダメなのか？（山中2018）」といった一連の議論を経て、生命科学部として、JASSO申請の中止の決断に至った。

3.6 教職員の熱意を伝え、信頼感を持ってもらう広報の工夫

学生が事務室窓口に来室し、留学の問い合わせや留学プログラムへの参加を迷っている相談が一定数見られる傾向があった。そのため、学生に、本プログラムへの学部側の取り組み姿勢（熱意・信頼性）を示すことも重要であると考えた。

既に述べたように、まずは英語の教員が、秋学期第1週目の授業内で、プログラムについてカ

ラーでの印刷媒体を一人一人の学生に配布し、熱心に紹介した。具体的な声掛けの内容としては、「皆さん（学生）の金銭的負担を減らそうと、できる限りの努力を尽くしたので、是非このチャンスを活かしてもらいたい」、「春休みの1ヶ月弱の留学は、理系の皆さんにとって取り組みやすく、是非、これをきっかけに自分を変えて欲しい。1回生、2回生、3回生それぞれに参加意義があり、来るものは皆歓迎する」、「今年から TOEIC の縛りはずした。皆さんのやる気こそが大切」と言ったものである⁴⁾。また、募集ガイダンスで、教職員によるポイントをおさえた説明と分かりやすい募集要項の配布、教員・職員・先輩学生の教職学一体となった全体構成とすることで、信頼性を伝えることを意識した。さらに、大きなカラーポスターを学内の学生の導線上に掲示することで、募集のイベント的な雰囲気醸成することも目指した。

4. 取り組み後の結果

4.1 参加者数の増加の達成

以上の改善策に取り組み、2018年10月2日～10月15日に募集を行った。募集の結果、生命科学部・薬学部・スポーツ健康科学部・総合心理学部の全対象学部から、56名の申し込みがあった。その後、選考を行い、全員が合格基準を満たしたため56名全員を合格とした。出発までに、経済的事情の急変等により辞退が数名あり、最終的に47名が参加した。

申込者数の56名と参加者数の47名は、過去最高の人数の達成であった。参加者の内訳は、生命科学部の1・2回生が多く、薬学部・スポーツ健康科学部からも参加があった。総合心理学部は、合格者がいたが、残念ながら経済的事情等で辞退となった。

表5 過年度と2018年度の申込者数・参加者数

	2013	2014	2015	2016	2017	2018
	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期
募集人数	12	40	35	35	35	35
申込者	49	43	20	28	13	56
最終合格者	43	40	20	28	13	56
不合格者	0	3	0	0	0	0
辞退者	1	5	3	4	0	9
参加者数	42	35	17	24	13	47

表 6 2018 年度の参加者の学部・回生ごとの内訳数

	1 回生	2 回生	3 回生	合計
【生命科学部】				
応用化学科	4	3	0	7
生物工学科	1	13	1	15
生命情報学科	2	5	2	9
生命医科学科	5	5	1	11
学部合計	12	26	4	42
【薬学部】				
薬学科	2	0	0	2
創薬科学科	2	0	0	2
学部合計	4	0	0	4
【スポーツ健康科学部】				
学部合計	0	0	1	1
【総合心理学部】				
学部合計		0	0	0
総合計	16	26	5	47

* 総合心理学部は対象回生が2～3回生

4.2 改善策の効果検証

参加者数の増加と改善策の検証に、アンケート、グループインタビュー、TOEIC スコア、募集ガイダンスの参加者数を指標として活用した。

アンケートは、記憶が鮮明な留学前に、参加理由等を聞くことにした。グループインタビューは、プログラムの効果検証・学生自身の振り返りを目的に、留学で身についた力（学習成果）等の設問を中心に実施した。インタビュー後には、教員からの助言も行った。

表 7 改善策の効果検証の指標

指標	内容
1. アンケート	留学前に実施。質問は、①「プログラムを知ったきっかけ」、②「プログラムの参加理由」、③「募集ガイダンスの評価」等
2. グループインタビュー	留学後に実施。1 グループ学生3名・教員1名で、90分間。①「留学で身についた力」、②「帰国して変わったことや新しく始めたこと」、③「これから伸ばしたい力」等をヒアリング。各質問のキーワードをポストイットにメモしてもらった。
3. TOEIC-SW スコア ⁵⁾	参加者のプログラム申込時点のスコア
4. 募集ガイダンスの参加者数	合計5回のガイダンスの参加者数

4.3 改善策の効果検証のまとめ

(1) 広報機会の拡充と内容の充実について、アンケートの「プログラムを知ったきっかけ」は、英語の授業内での案内が最も多く、英語の教員の呼びかけが最も効果があったと考えられ、その次に募集ガイダンスや教員の紹介、友人の紹介が続く。また manaba+R や学内の立看板、チラシも回答があった。これらの結果から、広報機会の拡充と内容の充実の効果が一定程度あったと考えられる。

(2) 参加費の抑制について、アンケートの「プログラムに参加した理由」は、奨学金が出る、参加しやすい費用との回答が一定数見られたことから、参加費の抑制の効果があったと考えられる。

(3) 特徴点の明確な伝達について、アンケートの「プログラムに参加した理由」は、語学能力向上、理系のプログラムであること、異文化体験が多かった。次に、短期のプログラムであること、単位修得ができるから、アメリカの最先端の研究に触れてみたかったから等が多かった。グループインタビューの「留学で身についた力」のキーワードを集計すると、コミュニケーション力・リスニング力の回答が多く見られ、参加目的の語学力と合致していることが分かる。また、行動力・チャレンジ精神の回答が一定数見られ、参加した理由の「自分自身に自信をつけたいから」と合致することも考えられる。これらの結果から、参加者は、プログラムの特徴的な目的を理解した上で参加していると考えられ、特徴点を明確に伝達したことが効果があったと考えられる。

(4) 募集ガイダンスと募集期間の見直しについて、アンケートの「プログラムを知ったきっかけ」は、募集ガイダンスの回答が一定数見られ、アンケートの「募集ガイダンスはいかがでしたか」は、参加意欲が沸いたとの回答が一定数見られた。また、募集ガイダンスの参加者数が合計 130 名（2017 年度比 6.5 倍）だった。これらの結果から、見直しについて一定の効果があったと考えられる。

(5) 申込資格の見直しについて、参加者の申込時の TOEIC のスコアの分布は、450 点以下が、16 人（34%）と一定の割合を占めていた。申込資格の TOEIC 450 点以上を設定しなかったことで、潜在層が申し込んだと考えられ、申込資格の見直しは効果があったと考えられる。

(6) 熱意を伝え、信頼性を持ってもらう広報の工夫について、アンケートの「募集ガイダンスはいかがでしたか」は、教員と職員、参加経験有の先輩の話を聞いて、プログラムへの信頼感を感じたとの回答が一定数見られたことから、熱意を伝え、信頼性を持ってもらう広報の工夫の効果があったと考えられる。

表 8 アンケート設問「このプログラムを知ったきっかけは何ですか?」(複数回答可)

回答項目	回答数	割合 (%)
英語の授業内での案内	26	55.3%
募集ガイダンス	10	21.3%
教員の紹介	7	14.9%
友人からの紹介	6	12.8%
manaba+R のお知らせ	5	10.6%
過年度参加学生の紹介	4	8.5%
学内の立看板	4	8.5%
チラシ	4	8.5%
「海外留学案内」・「海外留学の手引き」	3	6.4%
事務室付近やフォレストハウス入口のカラーポスター	2	4.3%
その他	0	0.0%
合計	47	100%

表 9 アンケート設問「このプログラムに参加した理由は何ですか？」(複数回答可)

回答項目	回答数	割合 (%)
語学能力向上のため	30	63.8%
生命科学部の独自の理系中心の留学プログラムだから	23	48.9%
異文化を体験するため	22	46.8%
実施時期(春期休暇中)が参加しやすかったから	16	34.0%
4週間以内の短期留学プログラムだから	15	31.9%
アメリカに行きたかったから	15	31.9%
単位修得ができるから	15	31.9%
自分自身に自信をつけたいから	14	29.8%
アメリカの最先端の研究に触れてみたかったから	13	27.7%
奨学金が出るから	9	19.1%
参加費用しやすい費用だったから	8	17.0%
大学が運営しているので安心だから	7	14.9%
滞在形態がホームステイだったから	7	14.9%
科学技術に関する専門英語の習得のため	7	14.9%
英語の授業で習得した発信する力を試してみたいから	6	12.8%
プロジェクト発信型英語を履修していたから	5	10.6%
UC デービスに行きたかったから	5	10.6%
就職活動に有利だから	4	8.5%
TOEFL などの語学要件がなかったから	3	6.4%
過年度参加者(留学サポーター含む)から勧められたから	2	4.3%
その他	0	0.0%
合計	47	100%

表 10 アンケート設問「募集ガイダンスはいかがでしたか。」(複数回答可)

回答項目	回答数	割合 (%)
募集要項や申込書がもらえて良かった	17	36.2%
教員と職員、参加経験有の先輩の話を聞いて、プログラムへの信頼感を感じた	14	29.8%
参加意欲が沸いた	12	25.5%
参加しやすい時間帯(昼休み・6時限)だった	10	21.3%
説明が要点をおさえていた	7	14.9%
その他	0	0.0%
合計	47	100%

表 11 参加者の TOEIC のスコアの分布

スコア	人数	割合 (%)
450 点以下	16	34.0%
451 ~ 600 点以下	23	48.9%
601 点以上	8	17.0%
合計	47	100%

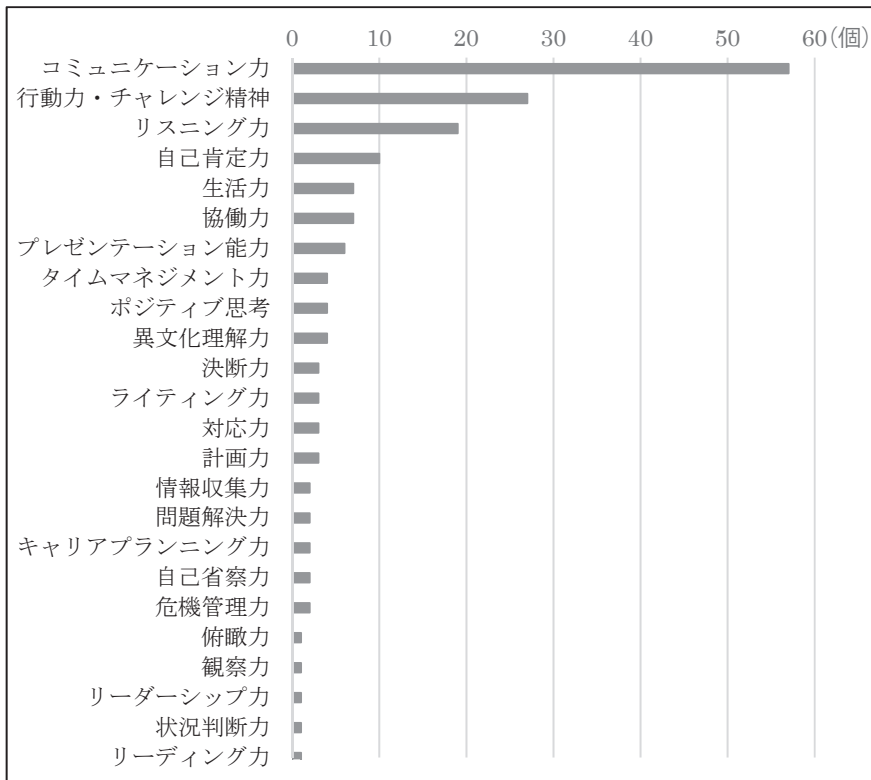


図3 グループインタビューでの身についた力のキーワード数の集計

4.4 職員の見立て

職員の感覚として、日ごろから学生が事務室窓口に来室し、留学の問い合わせや留学プログラムへの参加を迷っている相談が一定数見られる傾向があったが、留学への不安等から最終的に参加を見送ることも多く感じた。一方、今回の本プログラムへの申込者のうち、一人では参加が難しいが、多くの参加者がいるプログラムなら参加できるかもしれない、参加することで何か自信をつけるきっかけにできるかもしれない学生も一定数見られた。これらの学生に共通することは、留学への参加に悩み、あと一歩参加に踏み出せないところがあると感じた。

しかしながら、今回の取り組みのように、大学側が学生の関心と感受性を念頭に、熱意と信頼性を持って、プログラムの意義・内容を学生に伝えることで、参加に踏み出す後押しの支援ができるとの感覚があった。その感覚も、今回の改善策に生かすことができたのではないかと考える。また、留学を通じて学生が学び・成長するために、一職員としてなんとか参加を後押ししたい想いも取り組みにつながったと考える。

以上の結果により、参加者数の減少に対する改善策が一定機能し、減少傾向に歯止めがかかっただけでなく、大幅な参加者数の上昇を達成することができた。今後の課題としては、プログラムを知ったきっかけの manaba+R や学内の立看板、事務室付近のカラーポスターのアンケートの回答数が、それほど多くなかった点について、学生へのヒアリングを通じて、詳細な効果検証を行い、次回に活かしたいと考える。引き続き、今回の結果をベースに、安定した参加者数の確

保に取り組んでいきたい。

5. おわりに

最後に教職協働の観点から、感じたことをまとめる。今回は、担当の教員と職員による試行錯誤から始まり、具体的な改善策の立案・実施を教職協働で成し遂げることができた。取り組みを振り返ると、教職協働の強みは、教職員それぞれの視点・発想によるアイデアの融合・創出による一体性と、教員の学生の勧誘力や熱意の伝達力、職員の関連部課との調整力や受け手の学生を意識した広報力など、それぞれの強み・役割の多様性を活かせられることにあると考えられる。これらを発揮する前提として、双方の「対話」（大島 2014）をミーティング・電話・メールで随時綿密に行ったことと、話しやすい環境や場をつくるにあたり（西川 2019）、教員の英語プロジェクトルームと生命科学部事務室が隣接している立地条件があったことが、教職協働が円滑に進む要因の一つだったといえる。これらのことは、今後様々な業務を教職協働で進めるにあたり、大事な視点としていきたい。

なお、本プログラムの申込者数と参加者数が、過去最高の人数を達成することができたことは、生命科学部にとって、教学の質向上の観点やグローバル化促進の観点で大きな意義があると考えられる。学生の学習成果の向上や英語科目、実験・卒業研究等の演習・研究科目における牽引学生を育成することにつながり、学部全体の学びの質の向上に寄与できる。また、プログラムに参加した複数の学生が、ステップアップし、長期の留学プログラムに参加したいと相談に来ている。これはスーパーグローバル大学としての派遣者数の目標達成や、R2030 教学のグローバル化政策への貢献にもつながる。本プログラムの益々の活性化を通じて、生命科学部の教学の質向上やグローバル化促進につなげていきたい。

謝辞

立命館大学教育開発推進機構教育・学修支援センター河井亨先生には、本実践におけるアンケートとインタビューに関する協働と本稿執筆での協働を担っていただきました。心より御礼申し上げます。

注

- 1) Project-based English Program (PEP)。http://pep-rg.jp/ 等を参照。
- 2) 七者懇談会は、自治委員長、学部長、副学部長、学生主事、事務長等で構成される懇談組織。
- 3) 藤田齊之氏は、カリフォルニア大学デービス校 (UC Davis) の英語担当専任教員である。ノンネイティブスピーカーとして、唯一専任として英語を教えておられ、同大学国際教育センター大学間連携日本地区担当最高責任者を務めておられる。
- 4) 英語授業内における声掛けといえども、本留学プログラム担当の英語教員が、全英語クラスを直接受け持っているわけではない。同時間帯に開講される英語クラスも多く、各教室を巡回して「熱意のある」説明を行うことは現実的ではなかった。すなわち、我々が取り得た方法は、生命科学部、薬学部の英語授業を担当する全英語教員、これには言語教育センター所属の外国語嘱託講師及び授業担当講師が含ま

れるが、これらの教員に、本プログラムの熱意ある説明と呼びかけを依頼することであった。しかしクラスごとに教員による「熱意」の差があってはならない。そこで効果的でアピールなチラシを作成し、仮にこのチラシを読み上げるだけでも、教職員の意気込みが学生にも伝わるよう工夫した。実際、担当の全英語教員には、「授業内でチラシを配布し、読み上げる形で学生にアピールをしてもらいたい、できれば各クラス 1 名ずつで良いから参加者が出たらありがたい」旨の依頼を英語専任教員から行ったが、全ての英語教員が大変好意的に依頼を承諾し、積極的に各教員の色をつけた熱心な説明をして頂いた。結果的に、幅広い回生、学科から、多くの参加者を募ることに繋がった。

5) TOEIC-SW

留学前と留学後に、TOEIC-SW を実施し、スコアを効果検証の一つの指標とした。スコアは、帰国後に Speaking が平均 1.7 点向上 (88.5 → 90.2)、Writing が平均 14.6 点向上 (115 → 129.6) した。Speaking と Writing の両方とも向上し、特に Writing が向上しており、英語力における留学の効果は一部可視化できたと思われる。

参考文献

YAMANAKA, Tsukasa "A Report on "English for Science & Technology at UC Davis: The Overseas Program of the Colleges of Life Sciences, Pharmaceutical Sciences, and Sports and Health Science" 立命館大学高等教育研究 15、2015 年、101-112 頁。

山中 司、河井 亨「留学による成長をいかに可視化し評価として担保するか：留学プログラム「グローバル・フィールドワーク・プロジェクト」の到達目標デザインに着目して」立命館高等研究 18、2018 年、163-176 頁。

大島英穂「教職協働による大学運営：職員の役割を中心に」立命館高等教育研究 14、2014 年、15-27 頁。

西川幸穂「教職協働の現状と課題」大学時報、2019 年、18-33 頁。

資料

1. manaba+R の広報文

2018年度カリフォルニア大学デービス校留学プログラムの募集ガイダンスを案内します。

募集ガイダンスの詳細は添付のチラシを確認下さい。

なお、本プログラムの特徴は以下になります。

興味のある方は、ぜひガイダンスにご参加下さい。

1. 短期間のプログラムです。

プログラム期間（予定）：2019年2月8日(金)～ 2019年3月9日(金) 約4週間

2. 生命科学部独自の短期留学プログラムで、教育目標・学習成果は以下になります。

- ・英語力の向上
- ・異文化理解力の向上
- ・学部の教育内容と関連した最先端のサイエンス&テクノロジーの知識の獲得

3. 単位

基礎科目として4単位授与予定

4. アメリカのカリフォルニア州（カリフォルニア大学デービス校）での講義、研究室見学、フィールドワーク
5. 大学周辺の地域住民の家庭でのホームステイ
6. 現地での日本人教員達によるサポート
7. 海外体験が初めての方を主な対象にしたイニシエーション型

A Practice to Increase Participants of the Overseas Program by the College of Life Sciences Through Collaboration among Faculty and Staff

TATSUNO Yu (Administrative Staff, College of Life Sciences, Ritsumeikan University)

YAMANAKA Tsukasa (Professor, College of Life Sciences, Ritsumeikan University)

Abstract

This report describes a collaborative practice among faculty and staff on the overseas program titled “English for Science & Technology at University of California, Davis” administered by the College of Life Sciences in 2018. It succeeded in recruiting the most students in the program history, compared with the least students, of the previous year, 2017. This attempt could be a good practice of revitalizing existing overseas programs which get less attractive to students. Sharing critical feeling and identifying the problems radically, the following 6 points were targeted and practiced by the faculty and staff in charge, strongly supported by the college. (1) improvement of the program promotion, (2) reduction of the program fee, (3) clear communication of its merits, (4) revision of the recruitment guidance and its schedule, (5) renewing eligibility, (6) passion and liability.

Keywords

Original overseas program by the college, College of Life Sciences, Globalization of college, Collaboration among faculty and Staff, Passion